OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	雑感
Author(s)	項, 殿洋
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1992, 84, p. 63-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65957
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

雑　　感

項　殿　祥
大阪大学大学院
工学研究科造船学専攻

岩波新書が読みにくい、とりわけ、易のはなしという本が読みにくい、半年も前に趣味半分で買ったこの易経の解説書が、前書きすら読めずに、本棚に放り込んでいた。ところが、先日、日本橋の古本屋で、大正年代で中国で出版した易経を買ってきてひととおり眺めてから、易のはなしもだいぶ読めるようになった。一陰一陽、之所謂道、（一陰一陽、之れいわゆる道である）というリズムのいい文章がたとえ意味が完全に分からなくても、何度も口ずさみたくなる。日本語の読みにほとんど不自由を感じなくなった今も、中国語の古典はやはり性に合うだろうか。

しかし、この一陰一陽をコンピューターの”－0－1”と結びつけ、これがコンピュータの”道”といったら、強引といえば強引である。この易のはなしには、易と二進法に関する一節がある。二進法を作ったライプニッツは彼が考えた２進法の構想が易の六十四卦図の配列と同じであることが分かって大いに感動したという。今、易を論ずる人は必ず二進法を言及し、古い中国の陰陽論と現代のコンピューターとの関連がよく説かれるとのことである。これが偶然なのかあるいは本当に深い意味があるかは哲学者の議論になるから分からない。結論的には、ライプニッツのそれ（二進法）と易論とのアナロジーは成立しないのであると易のはなしの著者がまとめているが。しかし、著者は”０”、すなわち、無であると決めつけた上での議論には素人ながら疑問を抱かざるを得ないものである。

それはともかく、このような易経の生まれた中国だが、コンピューター事情といったら、とても日本の比ではない。日本のコンピューターの普及はもちろん、本屋に並べている多種多様のハード、ソフトの解説書だけでも、中国に帰るたびに本屋をまわる私にとっては、羨ましい限りである。８０年代の前半、中国でApple パソナルコンピューターの普及が全国的に大いに宣伝されていたのを覚えてはいるが、大学生だった私は見たことがない。もちろん、カタカナという便利な表記法のない中国だから、りんごを意味する中国語”苹果”というふうに訳している。国産のパソコンは”長城”が一番有名で、これは長城計算機公司という会社の作ったものである。”銀河”というブランドの大型コンピューターが有名であるが、新しい機種が出るたびに新聞が大々的に取り上げ、会社というより国挙げて作ったものである。どこで、誰によって作られているかはほとんどの人は分からない。今、北京で使われているそうである。パソコン市場の半分が国産で占しているようであるが、しかし、国内にこれといった強力なメーカーがない限り、市場の開拓には限界があ

る。コンピューターといえども、経済社会の中で発展するものだから、徐々に離陸するしかないだろう。この夏、２年ぶりに帰省したら、任天堂のファミコンがいたるところで売っているのにびっくりした。２年前に皆無だったというのにである。やはり、その魅力にとらわれたら逃げられないだろう。経済的な余裕ができたら、コンピューターの利用も大きく発展するに違いない。

この間、ある国から研究員として日本滞在の女の方と雑談したら、しきりに研究室ではいつも困った質問をされているともらしていた。というのは、あなたの国の大学では、コンピューターがありますか、こういう設備がありますかという類のものにどうやら腹たっているようである。有るとも！何をいっているのよといいたげな彼女には、私はなだめるしかなかった。彼女の国もおそらく中国とそう変わらないだろう。中国では特に大学で、手に入れるような先端設備はだいたいそろっている。ただ、充実しているかどうかの問題である。大学には、計算機センターがあり、だいたいの計算ができるが、計算費用が高く、大きなジョブを走らせるのに戦々恐々にならざるを得ないのが現状のようである。少なくとも私の勉強している構造力学の分野では、中国からの論文は理論式の誘導が多いが、示している計算結果が物足りないのに外国の方が気づいているだろう、理論の誘導は紙と鉛筆さえ有れば済むんだからであろう。

ところで、私自身のことになるが、大学時代にFORTRAN の授業で、簡単なプログラムを作って、それを大学にある計算機センター（確かIBM130だった？）に渡して、穿孔したテープを見たのがほとんど最初である。これがプログラムやといわれて、なるほどという感じだった。卒業研究でSAP Ｖという汎用構造解析プログラムを使って、海洋構造物の地震応答解析をやったのが忘れがたいことである。余談だが、このSAP のプログラムはアメリカのCALIFORNIA大学にいる中国系の教授の贈り物だそうで、当時の中国では大はやりだった。日本に来てから、衝突を受けた時の海洋構造物の損傷解析というテーマで研究をし、もっぱら計算機にお世話になったのは夢にも思わなかった。最初は先輩から何から何まで教えて頂いたが、今は恐れながらもたまに後輩にアドバイスをしている。何にしろ、計算機を利用する立場だから、自分で使う機能以外はほとんど分からない、しかし、計算機というのはなかなか分からないもので、一遍に分かるわけがないと自分も自分を説得して、自分の不勉強に言い訳をしたりしているが。こういう私でも、２年間計算機センターのプログラム相談員をやらせて頂いただいたからには、さすがにえらい。計算機センターの大室さんからセンターニュースに何でもいいから経験みたいな文章を書きなさいといわれて、だいぶ困っていた。あえて言えば、分からなくても何回もマニュアルを読むことである。これは私の経験というよりも私が先輩に言われたことである。分からないのはマニュアルを読んでいないからよと先輩に言われたことがある。マニュアルには、実に役立つことを書いてあるんだから（当たり前か？！）。

私も計算機センターを利用するのが長い、前期過程から後期課程まで、ほとんど毎日コ

ンピューターの端末前に座って計算をし、初めはＡＣＯＳで、次にＳＸ、そして、今、研究室では、計算機センターもほとんど利用しなくなり、ワークステーションＴＩＴＡＮが主流を占めるようになった。研究室の学生がいまもセンターのプログラム相談員をやっているが、私のいる研究室はもはやこういう相談が必要なくなりつつあることを実感し、時代の流れは速いものだと考えさせられている。このような流れについていくのがやっとで、いったい、将来どうなるかと聞きたくなるものである。一陰一陽、之所謂道、かつて、にぎやかだった計算機センターも今や端末室には人影少なくなっている。しかし、大型機からワークステーションへ、そして、再び、大型機へというのが”道”の論理にはかなっているだろうから、計算機センターも違った意味でのにぎやかさがやって来るだろう。

最後に、こんな雑談になって申し訳ありませんが、貴重な紙面を割いて頂いてありがとうございます。